【葬祭編】

家族・地域を含めた新たな「つながり」への展望と葬送墓制

－死の文化の変容と多元化する社会的紐帯の考察－

はじめに

山田　慎也

本報告書は、現代社会における葬儀や墓などの死者儀礼の営みを通して、変容する家族や地域社会の実態を多様な側面から把握し、今後の展望についても考察することを目的としており、3 カ年の調査を経た最終的な研究成果である。
現在は、少子高齢化がさらに進展し、また家族や結婚のあり方が変わって生涯未婚率が増大し単身化が進んでいる。そして葬送墓制も大きく変容し、あらたな紐帯が求められている現状について、葬儀や墓などの死後の祭祀におけるそれぞれの局面を、歴史的経緯も含めて調査研究を行うことによって、家族や社会の新たな「つながり」の形成を考察するものである。

すでに初年度述べているように、第 1 期でおこなった研究課題「無縁社会における墓と追悼」では、無縁化の様相を多方面から焦点を当て、現状に対処する人々の営みをとりあげてきた。そこでは、戦前期に形成された家制度が戦後になると民法改正によって廃止され、その後の高度経済成長によって、夫婦と子どもを単位とした核家族をモデルとして生活が営まれ、給与所得者の増加など職業の変化に伴い地域共同体も弱体化し、地域社会の形態が大きく変わることが要因としてあげられる。ただし戦後の家族は、核家族化しながらも、家を基盤とした死者儀礼を依然として行ってきた。しかし 1990 年代以降、少子高齢化が進みグローバル経済化による経済停滞により、戦後の家族構造や地域社会をも一変させ、葬儀や墓制も大きく変化させることとなった。

そのなかで、従来の先祖観とは異なる共同性など、地域や高齢者施設、墓などを媒介として、あらたな絆、血縁を超えた死者と生者の関係性の構築など、さまざまに模索する様子を、終活や葬儀を中心とした葬送班と、その後の墓や供養を中心とした墓制班に分かれて多方面にわたり詳細に検討を行ってきた。その際には、新たな時代において必要とされているものを捉える上で、現在の事態に至る歴史的経緯を踏まえることで、現代の事態の深層を明らかにしているのである。

その成果は多様であるため具体的にはそれぞれの論考を参照いただきたい。そして現状の諸課題に対し、必ずしも即効的な提案は十分にはなされていないものもあるが、中長期的な対応への方向性は提示できたと考えている。なかでも昨年来の新型コロナウイルス感染症の流行により、人との接触が避けられ、感染防止のための新たな生活様式によって、葬送墓制の小規模化や簡略化がより進み、従来の形態も十分にできない状況において、本研究の知見は今後の葬儀産業および社会へ一定の寄与を果たすものと確信している。

最後に本調査に協力を賜った方々や諸機関、また冠婚葬祭総合研究所には、この場を借りて心よりお礼申し上げる次第である。